

壁塗り交替についての考察

英語学科 4年 佐藤章子

謝辞

今回、この論文を書くに当たって、たくさんの方々に助けていただきました。まず、自分自身が興味を持ち選んだテーマにもかかわらず、それをどのような方向に進めていけばよいのかわからず、行き詰まっていた際に適格なアドバイスをくださり、途中立ち止まっただけの私に、あきれることなくご指導くださった府川先生には心よりお礼申し上げます。また、折にふれての勉強会やプレゼミなどで、新しい視点や考え方を与えてくださった先輩の皆様や後輩にも大変感謝しています。そしてなにより、共に多くのことを学び、経験し、悩み、いつも支えてくれたかけがえのない友達には、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

最後に、いつも私を信じ、自分の興味をもつ世界を追求するのを許し、そうできる状況を可能にし、見守ってくれている両親と家族に、実りある大学4年間の証としてこの論文を捧げます。

平成 14 年 2 月

佐藤章子

謝辞	1
目次	
0 . はじめに	3
1 . 壁塗り交替	3
1 . 1 壁塗り交替とは?	3
1 . 2 壁塗り交替に関する代表的な動詞	4
1 . 2 . 1 交替に関わる英語の動詞	4
1 . 2 . 2 交替に関わる日本語の動詞	6
1 . 2 . 3 構文交替を許さない動詞について	7
2 . 全体的解釈と部分的解釈	7
3 . 二重目的語構文	9
3 . 1 二重目的語構文と与格構文	9
3 . 2 所有関係の発生	10
3 . 3 to 前置詞と交替する動詞	11
3 . 4 for 前置詞と交替する動詞	11
4 . 他動性	12
4 . 1 他動性とは?	12
4 . 2 他動性の高さ	13
4 . 3 動詞からの距離	13
5 . 壁塗り構文 “他動性” と “動詞からの距離” という視点から	14
5 . 1 他動詞壁塗り構文	14
5 . 2 自動詞壁塗り構文	15
5 . 3 交替を許さない動詞	16
6 . 壁塗り構文 “動詞の意味構造” という視点から	16
6 . 1 行為の連鎖	16
6 . 2 pour 型の動詞	17
6 . 3 fill 型の動詞	17
6 . 4 交替型の動詞	18
7 . まとめ	19
参考文献	20

0.はじめに

高校までの英語の試験で、よく目にした問題の出題形式として「同じ意味の文に書換えなさい」というのがあった。このことから分かるように、一般的にある種の構文同士は言い換えること、すなわち交替することが可能であるといわれている。例えば、次のような対同士は、いわゆるニュアンスや情報構造等の微妙な意味の相違は別として、論理的な意味は等しいといわれている。

- (1) a. She wrote the letter to him.
b. She wrote him the letter.
- (2) a. The doctor advised that I should have a rest.
b. The doctor advised me to have a rest.
- (3) a. She is certain to come.
b. It is certain that she will come.
- (4) a. Your question is impossible to answer.
b. It is impossible to answer your question.
- (5) a. He insists on attending the meeting himself.
b. He insists that he will attend the meeting.
- (6) a. We waited for the doctor's arrival.
b. We waited for the doctor to arrive.

(高橋, 田部編 チャート式基礎からの新総合英語)

このような書き換え可能な構文のうち、ここでは次のような交替形を取り上げる。

- (7) a. John sprayed paint on the wall. (影山 2001:101)
b. John sprayed the wall with paint. (ibid.)

Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. Longman. (中右 実 訳(1981)『意味と形』こびあん書房)によれば、形が変われば意味が変わり、意味が違えばその違いは形式に反映されるという。この論文では2つの異なった表現形式を用いた構文の意味の違いと、それがどこから起因するのかを考察していく。

1. 壁塗り交替

1.1 壁塗り交替とは？

- (8) a. John smeared paint on the wall.

b. John smeared the wall with paint. (影山 2001: 100)

(9) a. John wrote this book.

b. This book was written by John.

(8)の2つの文は両方とも“Johnが壁にペンキを塗る”という現象を表している。異なっている点は、“塗る”という行為によって移動するものペンキ(paint)とそのペンキが塗られる場所である壁(the wall)がどこに現れているかということである。(9)の構文交替と違い、動詞の形態的が変化することが無いような交替を場所格交替、また、この構文交替の起こる代表例である“壁を塗る”という動詞をとりあげ、壁塗り交替(spray paint alternation)と呼んでいる。

この交替は英語のみならず、日本語にもみられる。交替を許す動詞には、paint など原料、素材を表す名詞と、the wall など、それが移動する場所を表す名詞が必要とされる。他方でこのような構文交替を許さず、移動物が前置詞句で表されている(8a)型でのみ用いられる動詞(fill type)¹、移動物が直接目的語の位置に置かれる(8b)型でのみ用いられる動詞(pour type)があることにも注目しなくてはならない。

1.2 壁塗り交替に関わる代表的な動詞

まず、(影山 2001)により、構文交替を許す代表的な動詞を、以下に挙げて見ていく。

1.2.1 交替に関わる英語の動詞

【英語の取り付けを表す他動詞】

Spray/load type : [塗り込み] grease, brush, dab, rub, smear, spread, streak

[積み上げ] heap, pile, stack

[放出] inject, spatter, splash, spray, sprinkle, scatter, sow, strew

[詰め込み] load, pack, stock

(10) a. Jack sprayed paint on the wall. (Tadao Maruta 1997:97)

b. Jack sprayed the wall with paint. (ibid.)

これらは典型的な他動詞であり、動詞の目的語と前置詞句との間で名詞句の交替が起こる。(10a)では場所が前置詞句で、(10b)では直接目的語で表現されている。

¹ 詳しくは 1.2.3 節参照

【英語の取り付けを表す自動詞】

swarm type : [光の放出] beam, burn, blaze, flare, flash, gleam, glitter, shine, twinkle
[音の放散] babble, bang, beep, buzz, chatter, clap, click, crack, explode, fizz
growl, hiss, knock, murmur, patter, ring, roar, thunder, wheeze
[液体の放出] drip, gush, ooze, splash, spout, stream, sweat
[反響] echo, resonate, sound
[開花] bloom, blossom
[振動・運動] dance, quiver, shake, tremble
[その他] abound, bustle, crawl, creep, hop, run, swarm, swim

- (11) a. Bees are swarming in the garden. (例解 現代英文法事典:61 項目)
b. The garden is swarming with the bees. (ibid.)

他動詞に対し自動詞の場合は名詞句の交替は、主語と前置詞句との間で起こる。
(11a)では、場所が前置詞句として、(11b)では主語として表されている。

【英語の除去を表す動詞】

取り付けや詰め込みを表す動詞の逆、つまり除去の意味を表す動詞にも同じ構文交替が起こる。ただし、交替のパターンによって2種類に分けられる。

- clear type : [除去] clear, clean, drain, empty
(12) a. John cleared the dishes from the table. (影山 2001:103)
b. John cleared the table of the dishes. (ibid.)

(12a)においては場所の the table は from で、(12b)では直接目的語で標示されている。移動物である the dishes は(12a)では直接目的語で、(12b)では of 前置詞句で標示されている。ここで気をつけなければいけないのは、この of 句は rob/deprive someone of something(人からものを盗む/奪う)と同型の構文であり、the table of dishes (皿のテーブル)というひとまとまりの名詞句ではなということである。

- wipe type : [取り除き] dab, distill, dust, erase, flush, polish, rub, scratch, shave, smooth, sweep, wash, wear, weed, wipe
[ふき取り] brush, comb, file, filter, hose, iron, mop, rake, shear, shovel, towel, vacuum
(13) a. John wiped his fingerprints off the door. (影山 2001:103)
b. John wiped the door (*of his fingerprints). (ibid.)

(13a)の場合場所名詞は off で標示され、(13b)の場合は直接目的語で表されている。

Clear タイプの動詞と異なる点は移動物である fingerprints が直接目的語になる場合は、場所名詞句 the door は前置詞 off を伴って現れることができる。しかし、b.のように、場所名詞 the door が直接目的語になる構文では、移動物である fingerprints を of で標示することができないということである。

1.2.2 交替に関わる日本語の動詞

日本語でも壁塗り交替は観察できる。

【日本語の取り付けを表す動詞】

[塗り込み] 塗る, 張る, 葺く, からめる / からまる, 和える, 染める / 染まる, 飾る

[積み上げ] 盛り付ける, 山積にする

[放散] 散りばめる, 散らかす / 散らかる, にじむ, 敷き詰める

[詰め込み] 詰める / 詰まる, 満ちる, 溢れる, 埋める / 埋まる

[光の放出] 輝く

[振動] 響く, 鳴り響く

[開花] 満開になる

[その他] 刺す, 巻く

(14) a. ジョンは、壁にペンキを塗った。(影山 2001:104)

b. ジョンは、壁をペンキで塗った。(ibid.)

日本語では、“取り付け”を表す他動詞では、直接目的語(ヲ格)と、場所(ニ格)または移動物(デ格)との間で名詞句の交替が起こる。

(14a)では、移動物である“ペンキ”が、b.では場所である“壁”が直接目的語の位置に来ている。さらに、(14b)では移動物の“ペンキ”は with に相当する「デ」で表されている。

(15) a. 車が道路にあふれていた。

b. 道路が車であふれていた。

自動詞の場合、主語(ガ格)と、場所格(ニ格)または移動物(デ格)の交替となる。

英語の clear に近い意味を持つ「片付ける」などの除去動詞でも構文交替は可能である。

【日本語の除去を表す動詞】

[除去] 空ける / 空く, 片付ける / 片付く, 飲み干す, 干あがる, ぬぐう

[漏出] 溢れる, 漏れる, 漏る, 流す, 絞る

[その他] かえる

(16) a. 政夫は、食器をテーブルから片付けた。(影山 2001:104)

b. 政夫は、テーブルを片付けた。(ibid.)

c. *政夫は、テーブルを皿で片付けた。(ibid.)

日本語の「片付ける」は意味的には英語の *clear* に対応すると考えられる。しかし、英語で *clear* タイプのときに現れる *of* にあたる「除去された移動物」を標示する助詞が日本語には存在しない。そのため、場所であるテーブルが直接目的語になり移動物である皿を「デ格」で表した(16c)は非文になってしまう。この点では、*wipe* タイプの動詞と同じ振る舞いをするといえる。

1. 2. 3 構文交替を許さない動詞について

【fill タイプの動詞】

Fill type : fill, cover, encrust, face, inlay, inundate, pave, plate, shroud

(Tadao Maruta 1997)

(17) a. *Henry filled water into the bucket.

b. Henry filled the bucket with water.

直接目的語に移動物である *water* がきている(17a)が非文であることから分かるように Fill タイプの動詞は直接目的語の位置に場所名詞しかとることができない。

【Pour タイプの動詞】

Pour type : [設置] put, set, lay, hang

[付着] attach, glue, nail, paste, staple, tape, stick

[重力による落下] pour, dribble, drizzle, ladle, spill

[中から外への排出] emit, excrete,

(18) a. Liza poured water into the pitcher

*b. Liza poured the pitcher with water.

(19) a. She dribbled paint onto the floor.

*b. She dribbled the floor with paint. (Tadao Maruta 1997)

fill タイプの動詞とは反対に、pour タイプの動詞は移動物が直接目的語となる(18a)(19a)の構文しか許さない。

2. 全体的解釈と部分的解釈

ここまで、壁塗り交替を許す動詞、許さない動詞についてそれぞれの振る舞い方についてみてきたが、以下それぞれの構文の意味の違いを(影山 2001)を中心に概観していく。²

(20) a. John smeared paint on the wall.

b. John smeared the wall with paint. (影山 2001:100)

壁にペンキを塗るという行為を描写しているという点では2つの文は共通しているが、移動物を直接目的語として表している(20a)と場所名詞を直接目的語として表している(20b)ではその解釈が異なる。直接目的語に移動物である paint がきて、場所名詞を前置詞句で表している(20a)では、ペンキが壁のどの部分に塗られたかには言及していない。壁の一部だけが塗られるという部分的解釈(partitive in)しかし、場所名詞である the wall を直接目的語としてとっている(20b)では、壁全体がペンキで覆い尽くされるという全体的解釈(holistic interpretation)が強く現れる。terpretation)でも、壁の全体が塗られる場合でもよい。

(21) a. John smeared paint on the wall, but most of the wall didn't get any paint on it.

b. *John smeared the wall with paint, but most of the wall didn't get any paint on it.

(影山 2001:107)

(21a)は移動物が直接目的語となっているので部分的解釈がかのうであるから、後半で「壁のほとんどにはペンキがぬっていない」と続けても問題が無い。ところが、(21b)では場所名詞を直接目的語としてとっている全体的解釈の前半部と、後半部とが矛盾してしまうため、非文になってしまう。

部分的解釈、全体的解釈は自動詞の壁塗り構文にも同様に現れる。

(22) a. Bees are swarming in the garden, but most of the garden has no bees in it.

b. *The garden is swarming with bees, but most of the garden has no bees in it.

(影山 2001:107)

自動詞の場合には主語と前置詞句の交替なので、移動物を主語にした(22a)は部分的解釈が可能なので、「庭のほとんどにはハチがいない」と続けても矛盾は生じないが、(22b)は場所名詞が主語にきているため、全体的解釈「庭一面がハチで覆われた」という前半部と後半

² 影山太郎編『動詞の意味と構文』2001 “第4章 壁塗り構文”を参照

部が矛盾してしまう。

(23) a 持っている本全部を本棚に詰めたが、本棚にはまだ隙間がある。

b. *持っている本全部で本棚を詰めたが、本棚にはまだ隙間がある。

上の例文をみても分かるように、2つの解釈の違いは日本語の壁塗り構文においても観察できる。移動物である本をヲ格で標示した(23a)は部分的解釈が可能であるため問題はないが、(23b)では場所名詞、本棚がヲ格で標示されているので本棚が本でいっぱい詰まっていると解釈されるので、「まだ隙間がある」という後半部分と論理的に矛盾してしまう。

このような部分的解釈、全体的解釈の違いは、壁塗り交替に共通した解釈上の特徴であるということができる。

続いて、同じような構文交替をする二重目的語構文についてみていくことにする。

3 . 二重目的語構文

3 . 1 二重目的語構文と与格構文

一般に書換えの例としてよくあげられる、もう一つの構文である二重目的語構文と与格構文の交替がある。

(24) a. Sally sent a letter to Harry. (池上 1996:82)

b. Sally sent Harry a letter. (ibid.)

(25) a. She made some coffee for us. (1996:85)

b. She made us some coffee. (ibid.)

上の2つの文は“誰かにものをあげる”といった授与行為を表現したものである。そのうち、(24a) (25a)のように受け取り手が前置詞句で表されている構文を“与格構文”という。一方、(24b) (25b)のように受け取り手を直接目的語として表しているものを“二重目的語構文”と呼んでいる。では、それぞれの構文の持つ意味の違いについて(影山 2001)の概説をみていく。³

二重目的語構文と交替する与格構文は通常 to または for という前置詞をとる。目的語(NP)

³影山太郎編『動詞の意味と構文』2001 “第5章 二重目的語構文”を参照

の後ろに場所的な前置詞句(PP)をとる動詞の中で、その他の前置詞 **on, at, into** などを用いるものと比較してみると、目的語の物理的な位置変化のみを表すものと、位置変化が所有関係の転移を含意するものがある。

(26) 位置変化のみ

a. Sue put a vase on the table.(2001:132)

b. Mother poured milk into the glass.(ibid.)

(27) 位置変化 + 所有関係の転移

a.Bill gave his car to Mary.

b.John mailed a letter to Sue.

c.Mother baked a cake for me. (影山 2001:132)

(26a)では花瓶がテーブルの上へ移動したということ、(26b)ではミルクがグラスの中に移動したということだけ、つまり物理的な位置変化のみを述べているにすぎない。それに対して(27a)では Bill の自動車の所有権が Mary に移ったということで、物理的な移動よりむしろ所有権の移動を意味している。(27b)では手紙が Sue のもとへ届く = Sue が手紙を所有するということになる。(27c) では私のためにケーキを焼く = 私がケーキを所有し、食べる、ということになる。(23)のように、目的語名詞が単なる位置変化だけではなく、広い意味で相手の所有物になると想定される場合に、それに対応する二重目的語構文が成立することになる。したがって、**put** のように物理的移動しか意味しない動詞は二重目的語構文と交替することはできない。

(28)目的語の物理的な位置変化のみ

a.Bill gave Mary his car.

b.Bill gave his car to Mary.

(29)目的語の位置変化 + 所有関係の転移

a.Sue put a vase on the table.

b.*Sue put the table a vase. (影山 2001:132)

3.2 所有関係の発生

与格構文が二重目的語構文と交替するためには、所有関係の発生が含意されるかどうか重要である。

すなわち、間接目的語(人)を O₁ 直接目的語(物)を O₂ とすると、二重目的語構文の意味は図のように表すことができる。



(28)ではO₁であるMaryとO₂であるhis carとの間に所有関係が成立するため、二重目的語構文にすることができるが、(29)ではO₁であるthe tableとO₂であるa vaseとの間に所有関係が発生しないため二重目的語構文で表現することはできない。

3.3 To前置詞と交替をする動詞

(30) a. Sally sent a letter to Harry. (池上 1996:82)

b. Sally sent Harry a letter. (ibid.)

(31) a. Sally sent a letter to London. (ibid.)

b. *Sally sent London a letter. (ibid.)

同じsendという動詞を使いletterを目的語とした2つの文で、(30)はletterとHarryの間に所有関係の発生を読み取ることができるので二重目的語構文は容認される。しかし、(31)では無生物の場所名詞Londonは手紙の移動した場所としてしか理解されず、Londonとletterの間に所有関係が成り立つとはとらえにくいので、二重目的語構文は容認されない。

(32) a. John sent the letter to the government. (影山 2001:135)

b. John sent the government the letter. (ibid.)

(32)では与格構文、二重目的語構文の両方とも成立する。(32a)と(32b)ではThe governmentという名詞句の解釈に違いが生じる。The governmentは人間に準ずると考えられる“団体”“機関”をさす一方で、その“建物”“場所”をさすこともできる。(32a)は与格構文なので単なる物理的移動を表しているため、“団体”“場所”の両方の解釈が可能である。しかし、(32b)は二重目的語構文なのでthe letterの所有者として理解される前者の解釈しかできない。

3.4 For前置詞と交替する動詞

Make, cook, singなどの動詞は本来なら主語と直接目的語だけをとる2項動詞であるため、「誰のために」という意味を表そうとすると、for与格がつく。

(33) a. John made a model plane for his son.

b. John made his son a model plane. = his son HAVE a model plane

(影山 2001:137)

(33a)は与格構文であるので、「彼の息子にプレゼントするために」という意味と、「ジョンが代わりに作った」という“代理”の意味の両方に解釈できる。一方、二重目的語構文である(33b)は「息子が受け取る」という“所有”の意味に限定されるため“代理”の解釈はなくなる。

(34) a. John opened the door for Mary.(影山 2001:137)

b. *John opened Mary the door.(ibid.)

先ほど図示したように、二重目的語構文の間接目的語と直接目的語の間には所有関係が成り立たなければいけない。しかし、(34a)の for Mary は「~のために」「~の代わりに」という意味であり、Mary が所有者になるわけではないので、二重目的語構文は容認されない。for 与格構文と交替する二重目的語構文の意味は「主語が何かを作って、相手にあげる」という意味が基本である。

以上、<行為によって影響の与えられる対象>を前置詞句で表すか、直接目的語で表すかで交替を起こすという共通点から二重目的語構文と与格構文の交替を概観してきた。では、<行為によって影響の与えられる対象>の現れる位置が違うということは、文の意味の違いとどう関わってくるのか。

4 . 他動性(transitivity)

(35) a. Jack sprayed paint on the wall. (Tadao Maruta 1997)

b. Jack sprayed the wall with paint. (ibid.)

先に説明したように、(35a)と(35b)では場所名詞と移動物の現れる位置が違う。そこで動詞の直後にどちらの名詞がきているか、つまり、直接目的語に何がとられているかという点に着目して考えてみる。そこで重要になるのが、“他動性”(transitivity)という概念である。

4 . 1 他動性とは？

他動性(transitivity)とは、主語として表されるものが目的語として表されているものに対して、その行為を通じてどの程度影響を与えるかということ、“行為の対象”となるものがその動詞の表す“行為”によって、どの程度影響を与えられるかということである。

以下(山梨 1995)を概説⁴

一般に、ある存在がある対象への能動的な行為を表現する場合は他動詞構文で表現され、ある存在の状態や、自立的な変化を表現する場合には自動詞構文で表現される。しかし、日常言語の多様な表現の中には、形式的には他動詞構文の形をとっていても、必ずしも能

⁴ 山梨正明(1995)『認知文法論』ひつじ書房 参照

動的な行為や動的な事象を表現していない構文も存在するし、逆もまた存在する。ある構文の他動性は、問題の事象に関わる存在がどのような意味役割を担い、どのような行為、変化、状態に関わるかによって決まる。

4.2 他動性の高さ

(36) a. *Mary sang.* (池上 1991:89)

b. *Mary sang to the baby.* (ibid.)

c. *Mary kissed the baby.* (ibid.)

d. *Mary kissed the baby awake.* (ibid.)

e. *Mary sang the baby to sleep.* (ibid.)

目的語も何も伴わない自動詞として表現されている(36a)では Mary の *sing* という行為は他者に対し影響を与えはしない。(36b)では同じ自動詞ではあるが *sing* という行為の向けられる対象が前置詞句で表されている。行為の影響とまではいかないが向けられる対象が明示されるので、(36a)より他動性は高くなる。(36c)の他動詞 *kiss* をつけた文では前置詞を介さずに、*the baby* を直接目的語として動詞の直後においている。他動性が典型的に現れる段階である。これが(36d)になると行為の影響が直接目的語に及んでいるということだけでなく、影響の結果、どのような状態に変化したかということまで表現されている。行為が対象に明らかに変化を引き起こしているという点で、他動性はさらに高くなっていると言える。本来他動性の低い自動詞 *sing* を用いた文でも、(36e)のように状態の変化を付け加えることによって同等に他動性を高めることができる。⁵

(37) a. *A cat bit a rat.* (池上 1991:27)

b. *John crossed the bridge.* (ibid.)

c. *John had blue eyes.* (ibid.)

行為の対象が他動詞の直接目的語として同じように表されていても、その行為の表す意味によって他動性の高さは異なると言える。(37a)では、ネズミが噛むという行為によって受ける影響、(37b)ではジョンが渡るという行為によって橋に与えられた影響、(37c)ではジョンに所有される、ジョンの一部であるという行為によって青い目にもたらされる影響の大きさには違いがある。一般的状況で考えると、(37a) (37b) (37c)の順番で他動性が高いものから低いものへと並んでいるといえる。

⁵ 池上嘉彦 『英文法を考える』 1991 ちくまライブラリー 参照

4.3 動詞からの距離

(38) a. She asked him to leave. (池上 1991:60)

b. She asked that he leave. (ibid.)

(39) a. Sally sent a letter to Harry. (池上 1996:82)

b. Sally sent Harry a letter. (ibid.)

行為によりもたらされる影響とは、動詞からの働きかけということである。働きかけの力が向けられるのは動詞の直後におかれている語になる。(38)の例文では動詞との間に *that* が介在している(38b)よりも直接目的語の位置にきている(38a)の方が *he/him* に対する働きかけの直接性が大きく、影響も大きい。それゆえ、動詞 “ask” の直後に代名詞が来る場合はその代名詞に動詞が直接的に働きかけ、「直接頼む」という意味となり、動詞の直後が節となっていて、その節の中に “he” がある場合は、動詞の代名詞に及ぼす影響力が間接的であるため「直に頼むのではなく、いわば人を介して頼む」という意味になる。

(39)の場合、直接目的語が *a letter* である(39a)においては、前置詞 *to* が示すように、手紙のハリーのもとへの移動に焦点があてられている。一方、*Harry* を直接目的語として動詞の直後にとっている(39b)では、ハリーに対する働きかけ・影響に焦点があてられる。*Send* という行為でハリーが受ける影響が大きいということは、*Harry* が *a letter* を受け取った“所有”という解釈につながる。先で説明したような二重目的語構文に所有関係という意味が含意されるということは、影響を受ける対象が直接目的語として動詞の直後に置かれていることから、もたらされる行為の影響が大きいという説明ができる。

5. 壁塗り構文 “他動性” と “動詞からの距離” という視点から

動詞から近い位置に目的語があると行為の影響が大きいということは、言い換えると、動詞から離れるとその行為により受ける影響は小さくなるということになる。

この“動詞からの距離”と“他動性”という概念をふまえて壁塗り構文をみしてみる。

5.1 他動詞壁塗り構文

(40) a. Jack sprayed paint on the wall. (Tadao Maruta 1997)

b. Jack sprayed the wall with paint. (ibid.)

(41) a. Bill loaded cartons onto the truck. (ibid.)

b. Bill loaded the truck with cartons. (ibid.)

(40a)では、移動物である *paint* が直接目的語となり、場所名詞は前置詞 *on* で提示されている。動詞にもっとも近く、行為の影響が大きいのは *paint* になるので、焦点があてられているのは <移動物に与えられた影響> *paint* の *the wall* への“移動”である。“移動”を

表しているだけなので、その結果としてもたらされた変化や状態については言及していない。よって、壁の全体が塗り尽くされているか、一部だけが塗られているかは明瞭ではないし、重要ではない。部分的解釈が可能になるのはこのためである。

もう一方の(40b)では動詞の直後にきているのは場所名詞 the wall であり、移動物の paint は前置詞で示されている。つまり、動詞にもっとも近い位置にあるのは the wall であり、焦点が当てられているのは<場所に与えられた影響> the wall に paint が塗られたという“状態の変化”である。ペンキを塗るという行為によって壁にもたらされる“状態の変化”といえ、通常「壁一面がペンキで塗り尽くされる」という事象が考えられるために、全体的解釈が強くなるのである。

(41) も同様に直接目的語に移動物 cartons が置かれている(41a)は cartons の truck への“移動”に、場所名詞 truck が直接目的語になっている(41b)では cartons の移動によって truck にもたらされた“状態の変化”に焦点があてられている。

(池上 1996)によると、(41a)と(41b)はどちらを対象として行為を解釈するかという点で異なっているという。(41a)では“Jack did something to paint”というとらえ方、(41b)では“Jack did something to the wall”というとらえ方をしているという。⁶

除去の意味を表す動詞についても同じ説明ができる。

(42) a. John cleared the dishes from the table. (影山 2001:103)

b. John cleared the table of the dishes. (ibid.)

(42a)では動詞にもっとも近い位置にきているのは除去される移動物の the dishes なので、焦点があてられているのは<移動物に与えられた影響> the dishes が table から取り除かれたという“移動”の部分である。よって部分的解釈が可能になる。(42b)では動詞にもっとも近い位置にきている場所名詞の the table への影響が大きいので、焦点があてられているのは<場所に与えられた影響> table から the dishes がすっかり取り除かれたという“状態の変化”つまり全体的解釈になる。

5.2 自動詞壁塗り構文

(43) a. Bees are swarming in the garden. (例解 現代英文法事典:61 項目)

b. The garden is swarming with the bees. (ibid.)

自動詞の壁塗り構文では主語に場所名詞が来たときに全体的解釈が強く現れる。これは他動詞構文では目的語が文に不可欠な要素であるのに対し、自動詞構文では主語が必要不可

⁶ 池上嘉彦(編) テイクオフ言語学シリーズ3 『英語の意味』参照

欠であることに関係している。動詞にとって重要な要素がその動詞により表される行為によって全体的に影響される解釈をもつといえる。⁷ (例解 現代英文法事典:第 61 項目)

5.3 交替を許さない動詞

交替を許さない動詞についてはどうであろうか。

(44) a. *Henry filled water into the bucket.(Tadao Maruta 1997)

b. Henry filled the bucket with water.(ibid.)

(45) a. Liza poured water into the pitcher.(ibid.)

*b. Liza poured the pitcher with water.(ibid.)

fill 型の動詞は移動物の移動先である場所名詞を直接目的語にとる構文にしかあらわれない。これは、fill という動詞が言いたいことは、「その行為の結果として移動先の場所が移動物でいっぱいなる」ということである。しかし、(44a)では動詞にもっとも近い位置にある移動物 water に大きな影響があることになり、移動物の“移動”に焦点が当たってしまい、部分的解釈が可能になってしまう。これが fill の持つ意味と矛盾してしまうので、この形の構文に現れることはできない。

これに対して、pour 型の動詞が移動物を直接目的語にとった構文でしか許されないのは、pour という動詞が表現する行為が移動物の移動がある特定の様態でなされなければならないということに起因する。(45b)では動詞の直後にきているのは移動先の場所 the pitcher なので“場所の状態変化”に焦点が当てられ、pour の持つ意味と矛盾してしまうため非文となってしまう。(池上 1996)

動詞の意味と構文との組み合わせが文の容認度に関係するということは、つまり動詞の意味が構文の交替に大きく関わっていると言える。

6. 壁塗り構文 “動詞の意味構造” という視点から

この章では、(影山 2001)により、“動詞の意味構造”から壁塗り交替を考えていく。⁸

6.1 行為の連鎖

動詞の意味を考える上で、重要になるのが人間の日常の営みを行為の連鎖としてとらえ

⁷ 例解 現代英文法事典:61 項目 参照

⁸ 影山太郎編『動詞の意味と構文』2001 “第 4 章 壁塗り構文”を参照

る考え方である。「父が包丁でスイカを真っ二つに切る。」という状況を、行為の連鎖としてとらえてみると、(46)の意味構造のように分解できる。

(46)行為連鎖による意味構造

<行為>	<変化>	<結果状態>
父が包丁の刃を スイカにあてて 力を加える	スイカに切れ目が できてくる	スイカが真っ二つ の状態になる

ここでは“切る”という動作を<行為> <変化> <結果状態>というふうにとらえている。つまり、“切る”という1つの動詞の中には、少なくとも3つの要素(行為・変化・結果状態)が含まれていることになる。 (影山 2001:6)

(47)行為連鎖による意味構造

<行為>	<変化(移動)>	<結果状態>
------	----------	--------

この、動詞の意味範囲を表す意味構造に、まず交替を許さない動詞にあてはめてみる。

6.2 pour 型の動詞

(48) John poured water into the glass. (影山 2001:109)

が述べている状況は、水が重力によって空中を上から下へ落ちてグラスに入ったということである。Pour という動詞の意味として重要なのは、液体が分断されずに、1つの流れとして落ちていくという様態である。つまり、意味構造の中の<変化(動き)>の様態に重点をおいて表現するものと考えられる。

(49)	<行為>	<変化(移動)>	<結果状態>
pour			

例えば pour のように、物体の動きに重点をおいて「XがYをZに動かす」という概念を表すだけの動詞は、移動物(中身)の動きに焦点があてられているため、中身指向の動詞と呼ばれる。

中身の移動に焦点があたっているということは、その結果、移動先の場所(容器)の状態がどうなったかはあまり重要ではない。そのため、移動物名詞を直接目的語にとる構文にしか現れないということができる。それゆえ、容器名詞を直接目的語としてとる構文と交替をすることができない。

6.3 fill型の動詞

これに対して、fillのように移動物の動きよりそれが付着する場所の状態に重点をおき、「YがZに動くことによってXがZの状態変化を引き起こす」という概念を表す動詞を容器指向の動詞と呼ぶ。

(50) <行為> <変化(移動)> <結果状態>
fill

容器指向の動詞は意味構造の<結果状態>の部分に焦点を当てて表現するものであるため、容器名詞を直接目的語としてとる構文しか許されないと考えられる。

6.4 交替型の動詞

pour型の動詞は移動の様式や力学的な作用のみを描写するために壁塗り交替(壁塗り構文のような交替)ができず、fill型の動詞では場所に及ぼされる影響のみを叙述し、移動物の動きを指定しないので壁塗り交替ができない。このように考えると、壁塗り交替が成り立つのは、動詞が「XがYをZに動かす」という移動の意味と、「YがZに動くことによってXがZの状態変化を引き起こす」という場所の状態変化の意味と、両方を持つことができる場合にのみ限られる。意味構造で表すと、(51)のようになる。

(51) <行為> <変化(移動)> <結果状態>
交替型

交替型であるloadの場合、移動物が場所に移ったというだけの解釈と、移動物が付着することによって場所の状態が変化したという解釈とがある。

(52) a. John loaded hay onto the wagon. (影山 2001:111)

b. John loaded the wagon with hay. (ibid)

(52a)はpour型の構文なので、意味構造の<変化(移動)>に焦点があり、hayの移動を描写している。これに対して、(52b)はfill型の構文であり、意味構造の中の<結果状態>に焦点があるので、the wagonの状態を描写している文となり、結果的にワゴン車全体が影響されたという全体的解釈が得られると考えられる。

7. まとめ

以上、「壁塗り交替」を“他動性”“動詞からの距離”“意味構造”などの面から考察してきた。壁塗り交替の本質は、動詞の意味構造<行為> <変化(移動)> <結果状態>のどの部分に焦点をあてるかということであり、動詞が“移動物の動き”と“移動の結果として場所に変化を与える”という両方の意味を持つことができるときにのみ交替が許されるということがわかった。ことをふまえて「0.はじめに」の例文(7)の意味の違いを考えてみる。

(7) a. John sprayed paint on the wall. (影山 2001:101)

b. John sprayed the wall with paint. (ibid.)

(7a)では動詞から近い位置にあるのは移動物であるペンキ(paint)なので、動詞の影響を大きく受けているのはペンキである。ペンキに対する動詞の影響といえば普通は、「ペンキの壁への移動」だと考えられるため“移動”を叙述した文だと言える。また、pour型の構文を使っていることから、動詞の意味構造の<変化(移動)>の部分に焦点があてられているので、その結果としての壁の状態は言及していない。したがって、壁の一部にしかペンキが塗られていない状況表現することが可能である。

これに対し(7b)では、動詞の影響を大きく受けるのは場所名詞である壁(the wall)である。壁に対する動詞の影響が大きいということは一般的に、「壁がペンキで塗り尽くされた」という事態が考えられるので“結果状態”を叙述した文ということになる。fill型の構文であるため、意味構造の<結果状態>の部分に焦点をあてて表現しているので、壁全体がペンキで塗られたという解釈が強くなる。結果的に、一般的な状況のもとで、壁の一部にしかペンキが塗られていないという事象を表現することはできない。

表現形式が異なるだけで論理的な意味は等しいとされてきた2つの構文だが、ある状況表現するのにどの部分に焦点をあてるかが異なっているということがわかった。形式の違いが意味に反映されるということは、どの形式を選択して表現するかによって、話者の認知の仕方が示されているといえるだろう。

参考文献

- 池上嘉彦 (1991) 『<英文法>を考える』 ちくまライブラリー
- 池上嘉彦 (編) (1996) 『テイクオフ英語学シリーズ 3: 英語の意味』 大修館書店
- 影山太郎 (編) (2001) 『<日英対照> 動詞の意味と構文』 大修館書店
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版
- 影山太郎, 由本陽子 (1997) 『<日英語比較選書 > 語形成と概念構造』 研究社出版
- 西村義樹, 中右実 (1998) 『<日英語比較選書 > 構文と事象構造』 研究社出版
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』 ひつじ書房
- 高橋潔, 田部滋 (1987) 『チャート式 基礎からの新総合英語』 数研出版
- Tadao, M. (1997) : " The Syntax and Semantics of *Spray/Load Verbs* " Kageyama, T.(ed.)
Verb Semantics and Syntactic Structure : Kurosio Pubilshers
- Naoki, F. Shigeru, M. and Carol, T. (1985) Verb classes in English and Japanese A case
study in the interaction of syntax, morphology and semantics. *Lexicon Project
Working Papers 3*. Center for Cognitive Science, MIT.